

チャレンジ！！オープンガバナンス 2022 市民／学生応募用紙

自治体提示の地域課題名 (注1)	No.	自治体提示の地域課題名	自治体名
	46-21-1	コミュニティ同士の交流や、新参加者の参加を促進する仕組みづくり	神戸市長田区
チームがつけたアイデア名 (公開) (注2)	災害 x 多国籍の文化が活きる「ここに居よう」の場所づくり		

(注1) 地域課題名は、COG2022 サイトの中に記載してある応募自治体提示の地域課題名を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。これは自治体提示の地域課題名とは別です。

1. 応募者情報 赤字部分は削除して該当の番号を記入

チーム名 (公開)	こべっこナース		
チーム属性 (公開)	1. 市民、2. 市民／学生混成、3. 学生	2.	
メンバー数 (公開)	10名		
代表者 (公開)	周杏奈		
メンバー (公開)	大西凜花、近藤円彩、濱田菜穂、大前大輔、大嶋由希子		

【注意書き】※ 必ず応募前にお読みください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2022_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2022 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。admin_cog2022@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示-非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。
(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公開いたしません)
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、非公開です。ただし、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アトバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様をお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。)

アイデアの説明全体が肖像権・著作権等を侵害していないことの確認	(○)
--	-----

2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容（公開）

(1) アイデアの内容、(2) アイデアの理由、(3) 実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、対象とする課題解決のために、何をする社会的な活動（サービス）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したくなり、活用してみたいなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなわくわく感のあるアイデアを期待します。2ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題の要点はこれ！をごく短く書いてください>

外から来た人がすでに存在するコミュニティへアクセスしやすくなったり、コミュニティ同士の交流が起こりやすくなるためには「どこの誰が」にこだわりつけようとするのではなく、「だれのどういった」困りごとを「言語と時空を超えて一緒に細かく解決できる」という、長田がこれまでやってきた活動の強みをリノベーション。

<この課題解決のために「何を」するアイデアか、それを「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」するかをわかりやすく書いていきます> <アイデアが具体的に実行される場面を想定してください。>

<よいアイデアを生むには関連データの分析確認とデザイン思考によるアイデアを使う人への共感が必要です>

「何を」するアイデアか、それを「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」するか

長田が優れているコミュニティ同士の交流や、新参加者の参加を促進する特性を活かした仕組みづくり

住民一人ひとりが健康と安心を実感しながら暮らすために、「ここに居よう」「ちょっと相談」という気持ちを、社会資源と地域の適正技術を用いつつ、涵養するために必要な地域の仕組みの実装を提案する。

防災教育を受けた潜在看護師を中心とした女性たちが活動する地元の最適な場所にリアルな拠点を設置し、バーチャル・遠隔技術の利活用によって、文化を超えて、「ちょっとたすかる」が増える仕組みをめざす。

こべっこナースが地域住民の活動をサポートすることによって、その地元の防災・健康知識がスキルアップし、コミュニティ同志の交流で双方が助けあえるという循環をつくる。

【ちいさなお世話でちょっと助かる】アイデア

神戸版「まちの保健室 DX」を実装する。

「まちの保健室」とは、阪神淡路大震災後、看護協会の活動としてはじまった、“生徒の相談や癒しの場として機能を果たしている「学校の保健室」のように、心や身体についての様々な気がかりや課題を、誰でも看護職に気軽に相談することができる場として機能。開催場所は、駅・郵便局・公民館・病院・保育園等人が集まる様々な場所。活動内容は、健康相談、子育て支援、介護相談やミニ講話等。（兵庫県看護協会）”といった活動である。

現在長田区では、区内で看護学部をもつ神戸常盤大学が実施している。

データとメタバースを使って活動を拡張、トランスフォームして、人が健康、防災（あんしん）を目的とした交流の涵養を目指す。

「誰が」

これを地域の活動拠点からの発信で、

- ・神戸出身の、既に活動に馴染みのある 20 代～40 代を中心とした看護学生、看護師、防災士など
- ・社会経験を積み、地域と個人との関係性への理解がある層・デジタルネイティブと呼ばれる Z 世代と大人になってからデジタルへ移行した世代の架け橋となりうる、幅広い世代への意識に寄り添いやすい層。
- ・働きながら出産や子育てを経験している人材や、自身や親世代の介護経験などが活かせる層。
- ・家族や地域社会との関係から、社会課題を自分ごと化しやすい層

2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容（公開）

にターゲットを絞る。

「どこで」・「なにを」

SNS を含むバーチャル空間と拠点のリアル空間

- ・阪神淡路大震災から活動している市民団体との協力のほか、大学コンソーシアムを通じた防災や地域、気候変動など社会課題に関心が高いコミュニティふくめ、既におおくの地域活動をされている地元との交流【リアル】
- ・子育てや介護を担い、働きながら地域活動に参加する女性が、インスタ・TikTok などいつでもどこでも視聴、受信が可能なメディアで情報発信と交流【バーチャル】

「どのように」

VR コンテンツ・メタバース空間で「理想のマイ保健室・避難所」を実現して交流する。

プライバシーと繋がりを守る私の保健室

- ① 未来において神戸で生活する中で、1 日どのようなものをどれくらい使っているのかなどを挙げる。
- ② 習慣になっていることなど、自分の生活にとって不可欠な要素を振り返って書き出す。
- ③ あらかじめワークシートで挙げていた理想やリアリティを書き出す。
- ④ メタバース空間に、不可欠な要素を中心としてものを置きながら相談にのる。
- ⑤ 他者の空間を体験することで、人にはそれぞれの生活があり、健康、不健康、危険、あんしん、その表現の方法も千差万別であることを理解する。実際にその空間に入って課題や支援を考えることができるため、体験を自分事として捉え、問題解決に向けてどんな避難所がいいのか、支援をすべきかを考えることにも繋がられる。言葉がなくとも、視覚的・体験的に個人が必要とする配慮を理解することもできる。学生たちはそれぞれの理想の避難所を問いかけ、たくさん文化や生活の異なる人達と協議していくことを通して、くらしを地域で進化させなければという意識を持つようになる。

創造して議論を行うことから、避難所の改善策や、実際にある課題の解決につながられる。

2. アイデアの説明（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

このアイデアを提案する理由（なぜ）について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類などの数値データやアンケート・インタビュー・経験の記述、関連の計画、既存の施策などの定性データも広く含みます。データは出所を明らかにしてください。

<このアイデアを提案する理由（なぜ）を書いていきます>

<先の（1）で書いた「何を」「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」するというアイデアの内容を支えるための、「なぜ」このアイデアがいいのか実現したいのかを上記のデータを示しつつ書いていきます>

「誰かに助けてもらおうのではなく、じぶんたちがなんとかするのを助けてほしい、たすけたい。」という声をつなげてあんしんを創りたい。

コミュニティ同士の交流や、新参者の参加を促進する仕組みづくりに女子力が必要なわけ

神戸市長田区は最も阪神淡路大震災による被害の多かったエリアであり、復興にも共助力が重視され、ソーシャルキャピタルの重要性が可視化されたエリアでもある。地元には震災以降、多様な背景をもつ保健医療職や土業らのボランティアが住民とのコミュニケーションのなかで NGO などの支援団体を立ち上げ多く活動し、個々の生活問題に対処してきている。とりわけ、外国人の多様な生き方を古くから受け入れて、いろんな支援を行ってきた歴史もある。

ソーシャルキャピタルすなわち、信頼関係や互助ネットワークを活かした生活再建が素晴らしかったという論文を発見する一方で、人々が持つ社会的配慮を要する多様なニーズ（困りごと）への理解や対応そのものがない、或は対応を受けるルートや支援者との繋がりも多様であり苦労もあるなどの指摘があった。

代表者の周は、長田区の隣の兵庫区に住む、家族が中国のルーツをもつ看護学生である。卒業研究では、「神戸で暮らす在日外国人を対象とした健康課題に対する国際看護の関わりについて」であり、神戸に住む外国人へのヒアリング時に、阪神淡路大震災被災時の経験についても話を聞くことができた。加えて神戸にある大学へ留学生として来日して今年で 2~4 年目になる学生やウクライナから日本へ避難してきている男女にインタビューを実施し、ニューカマーとして神戸という街で生活している上で感じる様々な問題を明らかにすることができた。このインタビューを通して、研究参加者が神戸で生活をする中で感じている不安や困難感分析した。

1)【文化的問題】

何よりも外国籍の住民が最初に必ず直面する問題の大半がこの【言葉の障壁】に付随するものであった。文化に関するサブカテゴリーはこの後の【健康・医療的問題】と【日常的問題】の中でも重複項目として挙げられるものを含めて 5 項目が含まれた。

2)【健康・医療的問題】

神戸で暮らす外国人の健康や医療に関した問題について、【受診に関する問題】 【受診前の受診行動に関する問題】 【受診に至らない健康問題】 【服薬に関する問題】 【病気に関する問題】 の 5 項目とその他のカテゴリーと重複した 1 項目を合わせて合計 6 項目が含まれていた。

3)【日常的問題】

日々の生活の中で生じる様々な問題に関して【被災時の問題】 【生活における問題】 【防災に関する問題】 【経済的な問題】 【就労に関する問題】 の 5 項目とその他のカテゴリーと重複した 3 項目を合わせて合計 8 項目が含まれた。

神戸で暮らす外国人のうち、オールドカマーには既存のコミュニティがあり、そこに帰属していることで生活における問題から健康に関する問題まで多岐にわたる問題解決能力を手にする事ができているのだと考察することができた。コミュニテ

いに帰属することでコミュニケーションが取られ、情報を手で、問題解決のための行動を選択することができていたのである。

さらに、神戸市に移住してきているウクライナ人に対する支援として、神戸市看護大学での支援活動のイベントにボランティアとして参加した際にウクライナ人と日本人のボランティア参加した大学生間で LINE のグループ作成、SNS のアドレス交換をしたことによって、一つの日本人とウクライナ人の共通のコミュニティの作成ができた。この働きから SNS を活用して様々な情報を共有していくことや、生活レベルで繋がりを持つことができた。現在ウクライナ支援として定期的に交流する機会に加えイベント以外の場でも繋がることで、日常的にコミュニケーションや連絡をとっていくことができる。このことは一つの重要な支援となっているのではないかと考えた。

東日本大震災の教訓や SDGs も相まって、外国人、ジェンダー、多様性、包摂性、ボトムアップ、人中心、地域ベースの活動などが多く提唱されているが、未だ当事者の独自調査や報告書は小さな意見として議論の場が上がっておらず行政サイドが理解しているところは少ない。神戸市防災会議においては、66 人中 4 名(6%)であり、理想とされる 3 割には程遠い。全国的にも自治体防災会議の委員は充て職であることが多く、女性を増やすことが難しいとの声も多く聞かれる。防災の主流化が進められる中で、そもそも課題となる女性の被害やトラブル、問題、配慮にしても、災害時の渾沌とした状況で、地域や家庭などのローカルで起きていることは、現状の対策である電話相談や行政職員の見まわりなどで対処できることではなく、じぶんたちでなんとかしたい。

濱田が神戸市看護大の学生として防災リーダー養成講座に参加して考えたことは、応急処置の訓練経験がないことで、避難誘導ができたとしてもその先の処置は救急隊や医療職種がくるまで何もできないということである。災害時に住民同士が助け合う「共助」を実現するためには、応急処置を自分たちで行う必要があると言える。傷の手当や包帯の巻き方は、知っていると知らないでは大きな差が生まれる。知識を持っていて、1 回でも実践の経験があることで地域住民を救うことが出来る。そのため、自主防災組織の平常時の訓練や防災リーダー養成講座などで、応急処置の訓練も行っていく必要がある。さらに、女性の活動と配慮は災害時に命と健康を守る基盤となる住民サイドの体制強化に直結することが証明されている。それもライフスタイルの多様化など現在の社会情勢に即した形で求められる（例：特有ニーズへの配慮、家事労働負担の偏重、仕事の復帰の子育てなど）。

この課題は DX での改善も期待されるが、災害・デジタル・ヘルスなどのあらゆる点で役立つちょっとしたつながりがなければ格差は広がるばかりである。災害が可視化した社会構造の課題であり、女性のライフステージによってもくらしや仕事の関心や悩み、時間の使い方の違い、伝統的な地域活動への関与では劇的な変化に努力を要する。これを解決すべく平時からのローカルの「声の可視化と解決スキル」のキャッチアップと底上げをし、個々の関心からより細かに地域活動への貢献し得るムーブメントが必要である。

それを実現すべく、昨年度、神戸市は、スタートアップ(成長型起業家)・ベンチャー企業と市職員が協働して本市の地域・行政課題を解決する「Urban Innovation KOBE(アーバンイノベーション神戸)」[「課題 2」デジタル技術を活用した、若者向けの防災コンテンツをつくりたい！]で、消防局市民総合防災センター 市民研修係とともに、理想の避難所コンテンツを市民が作るワークショップを実施し、今回の応募の元となる避難所メタバース空間を試作し、ぼうさいこくたいで発表した。神戸市芸工大と神戸市看護大が共同で進化させている。

VR 空間上のセッションを通じて地球上の誰もが地域レベルでの脅威と安心の理解モデルを共進化し、現実の生活に活かすことができると考えている。

2. アイデアの説明（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを**実現する主体**、アイデアの**実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）**の**大まかな規模とその現実的な調達方法**、アイデアの**実現にいたる時間軸を含むプロセス**、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、**アイデア実現までの大まかな流れ**について、**2 ページ以内**でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

＜アイデアに即した実現に向けての具体的な活動を上記のポイントに即して工夫して書いていきまづ＞

＜以下のように分けて書いていきます＞

1. **実現する主体**

2. **実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）**の大まかな規模とその現実的な調達方法

3. **実現にいたる時間軸を含むプロセス**

こべっこナースが、地元の最適な場所にリアルな拠点となるデジタル保健室を設置し、バーチャル・遠隔技術の利活用によって、言語・専門分野・文化を超えて「ちょっと助かる」を創る、「まちの保健室 DX」を立ち上げる。

1. **実現する主体**

神戸市看護大災害・国際看護ゼミ、神戸市芸術工科大学プロダクトデザインゼミのメンバー、兵庫県看護協会、兵庫県防災士会の有志、「こべっこナース」を結成し、主体となる（既に Urban Innovation Kobe、防災士研修、ウクライナ支援活動でチームを作り協働中）。

2. **実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）**の大まかな規模とその現実的な調達方法

実現に必要なもの

「デジタル環境」

- ・通信環境
- ・モビリティ+リモートワーク環境（パソコン、モバイルルータ）
- ・災害・健康危機管理コンテンツ基盤（健康危機管理データカタログ・マップ、防災 VR コンテンツ）
- ・多拠点多職種による相談対応ツールとする（災害・健康危機管理メタバース）

現実的な調達方法

地域の協力者を増やして調達できないかを検討する。

- 新たな地元リーダーのブランディング、発信
- ・「ひとの繋がり」であんしんな長田をブランディング、上書きし、参加者確保
- ・併せて女性のウェルビーイングな働き方生き方提案して参加を促進。（地域貢献、災害対策力向上などの企業評価に寄与）
- 対象地域のカウンターパート、ステークホルダーを活用
- ・現在も有志に対して勉強会を開催している兵庫県防災士会や兵庫県防災リーダー養成講座と連携し、参加促進。
- ESG 等に関心の高い企業へのアプローチ
- ・神戸（実質的に健康福祉課、危機管理室・市民防災センター・新産業課）との連携。

国際看護師協会が提唱する災害看護コンピテンシーのドメイン 8 つ別（予防・備え、コミュニケーション、安全安心確保・緊急対応、復旧・復興、倫理）に関する基礎知識と、地域をモニタリングするコンテンツとして、国内外の多様な事例を XR プラットフォーム「STYLY」を利用して搭載し、現場の課題を具体的に解説する教材コンテンツ

2. アイデアの説明（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

を開発する。プロジェクトの中で利用し、観察の方法や手法、手順をノウハウとして積み重ね、災害時の活用方法についても検討する。

- ① バーチャル空間として保健室を表現し、「ここにいていい」モデルを共有する
- ② 各地のデジタルナースの VR 空間でのセッションを通じて、固有の文化的背景を含んだ脅威と安心のメタ認知を涵養する



図.作品（安心感のちょっと避難メタバース：神戸市看護大 大谷作）

3. 実現にいたる時間軸を含むプロセス

現在参加している、ウクライナ避難者支援からみてきた、「移住してきた時にこまったこと」、「いまでもこまっていること」のヒアリング結果から、「日常生活」、「健康」、「防災」に分けて、SNS でのショートムービーを制作している。これを整理し、だれでも使えるコンテンツとして提供する。（卒業演習でいくつかを試作しており、後輩に引き継ぐ）

世界中の看護師が使うマニュアルのなかにも、災害時に住民の力を借りて対応する能力開発や、米国 FEMA の防災ボランティア研修にある、一般市民が必要な応急手当て、メンタルヘルスなどの対応を細かく動作毎に分類する。

女性防災士の方にご教授いただき、資料に写真や動画を使用することで処置に対するイメージがわかりやすいことが分かっている。文字やイラストだけで説明するよりも、写真や動画を使用した視覚的な教材を用いることで、受け手が吸収しやすい内容となり、効率よく応急処置について理解できるマニュアル開発を目指す。（卒業演習でいくつか



を試作しており、後輩に引き継ぐ）

2) 1) を用いての保健室 DX の運用

2. アイデアの説明（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

まちの保健室のDX推進にむけて契約手順、受入体制準備、情報共有ルール、支援マニュアルを整備し、利活用モデルを考える。